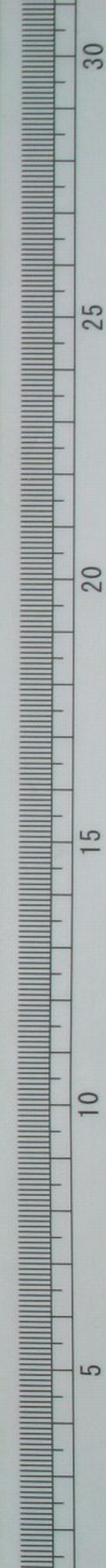


春堂獨語

卷一

18

特別
14
1919
101



自家の之を文へて彼らにせしむる者ありしにのみある
顧ふよりありきしりく支那の名人うまにけいふ
僅うの日月の間に沈氏のこどく大董陶を考へり
画を考へて其人なき無りと云ふてよろしい、即ち
沈氏のありを伊言九う年沈氏の没とを終園が
本に傳し何れも沈氏のなき大なる記述を述べて
さうつに沈氏を真保十六年の老若川に聘せり
て本朝一十年の藝術史に記す我國に存しし
僅々二年のあり、此間多くの門人も出来れば、
と傳友とてその代補江と云ふ、り若く為の海

とゆふ沈氏のまじ、沈氏の名を以てある際んまき、
人と呼ぶるもあらず、まじ沈氏と自らしむるに
其の字を伝ふ能ふは、伝ふを傳ふにせしむる
まじ、宋は元は徳為監、其のありきと云ふ、
画人出たるを、

○浮世傳

浮世傳を江戸傳と申す、呼ぶにこそ、今尚ほ江陰
一と云ふ、^{田舎}江戸傳を呼ぶにこそ、
今も江戸傳の一程の傳は、
今も、此の傳を本来肉筆とて印刷を考へ、
今も、其の監解を認め、
今も、其の川師を

里北の一種の印刷画を賣つ美しきことなれ共つたのむき
れなる印刷画はあつたる彫り物の精なるもの
たるやとてさうして、田舎をさへ出来さへいふ江戸
其の繪画はあつたのむき、なれ錦後の進歩なるを
此の画も大いなる進歩したるが、錦後の衰へたるは
名も出るもさうなれ、江戸の外、需要あつたは、
と後つて江戸のみならずも出る、つたむき

○文晁

文晁の画名の降々となりしころ、畫を乞ふ行つて
七取次が袴を着けし出て、迎接しきつて本人

と云つて其を頼むるむき、ことと出来さうつた云
ふすむあつた、たのむむき、たのむむきの扱ひを言
ふ

文晁の甚きむき、其つて入るゝの殆ど人毎月ニ七
の日の秋名たりしと玉座をといふ、その言ふ按
むきと茶と墨紙硯材類を常キけるん、
このまゝくいつも行をを立し、
あ又弟の庖厨の料理人を抱く、
入るゝと午飯を供し杯を御啣やつ、
とて、又年始め年暮宗廟上の開閉九月九日の生り

ふいば門生を集めて酒宴を張るししが是を橋
魚河岸をも大小の鮮魚を宴の姫しと宴の料
理を世せしとるの習ありしとて又文晁平生
嗜ぬちとるの酒を文蝶と稱し酒樽の苞包
に文と銘するものありしが江戸中の酒を
この印の酒樽と名を取るといづれの店も侍く
ありしとるふことと年如の宴の事と江戸中の
藝人を呼ぶ事ありしことと法大名の家年とい
は物玉の事ありしとて已むしつてを止め又
晁の年如の宴の事と名をとりしものありし

とて

○尾形光琳

尾形光琳、之を江戸に生みたる高貴の社名を
光琳の門よりつぎに腕の染物、染物の事ありしを
同じくししことと名をえたる事ありしあり、又
光琳が札差等の事ありし事ありし事ありし事ありし
彼等とてを教へてんと竹皮と描信を施しし事あり
握り餅を包むと花をなすけ、捕人の名ありし
彼等とて竹の皮を巻きたる事ありし事ありし事ありし
これらも、此以日本美術用語の考證を記す

に、幕方と此の勢に倣はるる所の皮を穿ちしきこめて
札差の仕業をうんと此に注意をよせける事案のお
克琳の志業をいひ、克琳を之に為め、あせらんとい
と記せらるゝ、いふに余の初めをかくあひあること、こ
れ載せし世の老とあらざるのひある

○江漢の洋画

余の少年の頃、とて少女の玩具として供するふいそき
手鏡を何れの玩具店より購けり、その手鏡の上
に、硝子をけし、その硝子の表面に美人画ありと
もつて、奇麗な彩色し、上とすうしとて、

そのころ、三流の出来を自づから、此の画法を、
西洋風のものと思ひ、誰れか之風をいふ
と、いふが、頃の横井ゆたの、
司馬江漢の画法であることをいひ、
江漢とよするの洋画の名称と云ふこと、
正のころ、
一時的輸入品と云ふこと、
灰燼に附さん、
うき世のそとを再興し、
係りあつた此の画風を、

係し北院を道しにのち重なる佛画で、海客や経文中
のお像画が、北院を道しにのち重なる、日蓮の像画の歴
史を述べてあり、流俗の画史と異なり、其の
意を、又こゝに、流俗の、其の、佛畫の
あつた、重なる、佛畫の、あつた、即ち、聖徳太子
や、傳教大師、や、弘法大師、と、主流の、画史、と、あつて
三博士の、人々の、敷教の、手、あつて、書いた、の、心、ある、こ
の、ゆゑ、その、佛畫、を、其の、あつた、こと、の、心、を、うつ
た、の、心、ある、こと、を、其の、あつた、こと、の、心、を、うつ
こと、を、初め、て、おこつた、似、傍、と、即ち、宗室の、画史、と、い

を考ふに、余後河津、瀬姓、と、い、巨勢、金剛
の、法、を、結、ぶ、其の、作、る、程、の、心、を、留、め
た、の、心、ある、こと、を、佛畫、と、似、傍、即ち、宗室の、画史、と
と、進、む、こと、を、佛畫、と、似、傍、即ち、宗室の、画史、と
と、佛畫、と、似、傍、即ち、宗室の、画史、と
画史、と、い、た、の、心、ある、こと、を、其の、手、を
異、な、る、こと、と、い、は、現、存、の、山、寺、の、佛、史、の
十二、神、の、下、佛、又、隆、徳、の、佛、史、の、心、を、留、め

をえんん彩色の指圖としてある、今も分業の
法行八九なることを思ひ、蓋し此法を宗を多うく
の多手版を要すと、彩色本（此法を宗を多うく）の重きを置かず
し、彩色するものを（此法を宗を多うく）つくは信と呼
ひしを以て、亦う思ひ、

○佛教と信画(下)

降つて鎌倉是利の法より、佛教のため支那画が
輸入され、此のころを佛画とて輸入せん、
此のころ、（此法を宗を多うく）輸入せん、
あつ、言の支那との往來を多くと佛教に限らる、

位五、この佛徒と修行の信、（此法を宗を多うく）、
此の宋元の名家、（此法を宗を多うく）、
又支那の坊サン、（此法を宗を多うく）、
進、（此法を宗を多うく）、
う蘭溪、（此法を宗を多うく）、
酒、（此法を宗を多うく）、
磨、（此法を宗を多うく）、
の、（此法を宗を多うく）、
行、（此法を宗を多うく）、

信画と云ふは、（此法を宗を多うく）

此法を宗を多うく、（此法を宗を多うく）

とんとて誠草花たり行いん、遂に古今獨歩のえ
を傳ふるものなり。蓋し平安時代の繪画を雪舟
よりしてとらむと大成するなりといはんや、雪舟
の如く物類の長周防山に留りて天冠山下の雲
を筆にそと雲谷庵と號しぬ。こゝに於て雲谷の
名より其後全圖を充てる雲谷派とい稱しと画を
輩とす者多きなり。而も其中弟子雪村よ
く雪舟の筆意を學びて殆んど之を伯仲し、
雲谷派を狩野派とすといひたり。其の用ゐる筆
其後我回古来の畫道を傳へて名手と稱せり。其

克行よそのい又宗元の畫風をも究め之を新裏しと稱
の如く行を出して狩野山行を出し其子元行出雲の
元亨も後全門の永遠守行の如きを出し日明と
宗元の畫風を受けたり。秋月宗淵茅の大家を出し
之を要するも我美術界をなすも佛教の衰微ら
せし。宗元の法を受けし繪画の光彩を放つるは
其の如くありしものなり。佛教と繪画決して縁なきもの
なり。

○篆刻の十三刀法

篆刻とは、篆の如く、似て文意を屬す、隨つて刀法の如く、文

平書目より書法に於ける一般の事、是れ其の文意の
小技、日清韓に特有する一種の美術と云ふを得べき歟、刀法
の幾十種類ありと云ふも、其の字を以て重きを
置くと云ふ、筆入、双入の三刀法あり、又、此等も補
刀の法と云ふも、又、補刀の法の名稱も、必ずしも一
と云ふ例、は平刀を覆ふ刀と呼び、龍刀と、挫刀と呼び、舞
刀を刺刀と呼ぶ如く、其の名家より、其の稱呼を異
なり、左の抄出する刀法十種類、と清の陳克恕、
刻録する載、（附石、刀法）

刀法

刀法有三、起神最上、傳神次之、最下象形而已、用
刀時、先審文係何文、想像用何刀法刻之、宜心手
相應、各得其妙、文有朱白、印有大小、字有稀密、
畫有曲直、不可一概率意、當審去住、浮沈、宛轉、
高下、以運刀之利鈍、如大則腕力宜重、小則指力
宜輕、粗則宜沈、細則宜浮、曲則宛轉、而有筋脈、
直則剛健、而有精神、勿涉死板、軟俗、墨意宜兩
盡、失墨而任意、雖更加修飾、如失刀法、何哉、楊
長倩云、執刀須拔山扛鼎之力、運刀若風雲雷

電之神、何曾漁云、刀之病有六、心手相乖、有形無意、一病也、轉運緊苦、天趣不流、二病也、因便就簡、顛倒苟完、三病也、鋒力全無、專求工緻、四病也、意骨雖具、終未脫俗、五病也、或作或輟、成自兩截、六病也、按此六病、非深於刀法者、不知也、今將用刀十三法、開後、

○正入正刀法

正入刀法者、以中鋒入石也、豎刀略直、直則勢雄、自見奇傑、

○單入正刀法

單入者、以一面側入石也、把刀畧臥、臥則勢平、臻於大雅、

○雙入正刀法

雙入者、兩面側入石也、臥刀勢平、不可輕滑、輕滑則軟、無生動之機、以上三法、俱謂之正刀、且貫乎諸刀法之中、用久而化、不知其然、拳手合妙、不在刀也、執刀求之、則癡人說夢矣、

○衝刀法

衝刀法者、字畫平行、精工俱備、而其文不見雄渾、是漸積有功、而神奇未至耳、則以中鋒提而衝之、

此刻白文妙訣也。銜則槍上無旋刀，如古細白文之類。

○澀刀法

澀刀者，欲行不行，如生澀之狀。書家謂意在筆先，此則猶之刀行意後也。夫知有神行于筆之先者，則刀自不得輕滑而潦草矣。摹古之作，此法最為得神。

○遲刀法

凡寫字宜速，用刀宜遲。遲非慢也，徘徊審顧，自不得率意，以至輕滑停勻，則入於俗，不臻大雅。

○留刀法

留刀者，非摩澀之類也。篆合幾字，虛實相應，謂之章法。捉刀入石，先相章法，不可將一字一畫刻完到相應處，照顧不及，則成敗筆矣。須散之，落刀體會章法，虛實緩急，行止頓挫，先留後地，故謂之留。知留則知章法矣。刀法為得不神妙乎。

○復刀法

復刀者，謂一刀不到而再復之也。刀入石有三，而筆入最妙。筆入易於爭奇，雙入不能免俗。然筆入是最上刀法。復之以救其失也。先悟其病在何處，正取一刀救之，不宜長，宜短，不宜連，宜斷，不宜太盡。竊宜留餘，長則失勢，連則犯俗，盡則敗矣。

○輕刀法

輕者非淺平之謂也。刀行有輕舉之勢，不癡重耳。

○埋刀法

埋刀者，以刀言之，則入石而沉着，以筆意言之，則藏鋒而不露，合而各合，故曰埋也。

○切刀法

切刀者，如切物之狀，直下而不轉旋也。急就切玉，皆用此刀。如遇輕滑敗筆，則以切刀法救之。

○舞刀法

舞刀者，行而不知埋刀者，藏而不露，皆臨外傳。

神熟極生巧耳。如故意舞動行刀，則又俗筆之最惡者，不入刀法，為下下品。

○平刀法

平刀法，刻成朱文，而竟呆版，則以平刀平起其脚，而後刀救之，白文亦有間用之，但不多遇耳。

○印譜

今將行世印譜之佳者，略開數種於後。

篆刻鉞度

一宜和印譜四卷

一晁克一集古印格一卷

- 一 王厚之復齊印譜一卷
- 一 顧叔夏印古式三卷
- 一 姜夔文集古印三卷
- 一 吾衍古式二卷
- 一 趙子昂印史二卷
- 一 胡養中印彙五卷
- 一 何巨源印苑
- 一 蘇喇氏蘇氏印略四卷
- 一 程彥明印則二卷
- 一 吳貞孟栖鴻館印選

- 一 朱修能蘭閣藏印及印經印品
- 一 趙允夫刻符經
- 一 葉羽遐名山堂印譜
- 一 馮昭玉竹韻軒印正五卷
- 一 吳寶存印澄一卷
- 一 吳疏九印林
- 一 許寶夫印略印鑿谷園印譜韞光樓印譜
- 一 胡曰從印藪印存初集四卷
- 一 陸子鉉懷古堂印稿
- 一 何不遷印史六卷

面向西方、後北背東方、如來中夜寂然無聲、於是時頃、便般涅槃、娑羅樹林四雙八隻入涅槃、已東西二雙合為一樹、南北二雙合為一樹、垂覆寶珠、蓋於如來、慘然變白、猶白鶴、大衆哀聲、普震一切世界、

とあり而して此の大衆の云ふ甚だ隆高、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩訶喉羅、人非人等と云へる、諸天部と五十二類の高生と書きし、八株の樹木、則八隻の娑羅樹なり、(娑羅樹ハ椶櫚科の樹として枝木家のハルニエサウトと呼ぶなり也)

満月ハ二月十者の如きを表し、雲に乗して降りて、雲端の一僧ハ阿那律と名する、次の大天め、佛母摩耶夫人と、摩耶夫人往りて阿那律升伽利天、以告摩耶夫人、摩耶自天而下云、とあり、以上涅槃像の描き方なり、而して圓筆に乗せる鳥羽像の畫き方、えんとも涅槃像のまじりたる、娑羅樹の描き方、二重長を以てし、而して倚てその是れ天なり、茶臼の降り、誤まつて樹なりと見るなり、と、又、鼠の畫き方、えんとも樹の描き方

を猫又と忽ち妖術を起し、鼠を捕まへて子に鼠を
喰ひしむ。其の罪深しとて如来の法を
信じて悔ふと云ふ。侍する不始し、是れ
果して佛^行を招接せしむる事か。況んは
何うと云ふ

めんと大括する事因らるるを古書に鑑定する事
いと僻事多しこのこと又関しを黒川春村
夢のたぐし希に倭錦題文抄を著らして
誤を論破せし事海内第一條の先師を世に
知らんや、今も既によく考へし

○先づ角土佐派の始祖とてその後上内匠頭藤
原基光并に五位下主殿藤原隆能ひあり隆
能も藤原派と云ふに人々倭傳の名人があり、此の人の
孫の経隆が後土佐守ひあつたとき、らんまひ春
日と稱したのを土佐と改め終に土佐派と呼びし

扱ふるつたとてい傳へてある、

○土佐の三輩と云ふは先長、先代、先起の三人
ひあり、三の内先長を鎌倉時代の倭傳を代表する
人ひ先代を安山時代先起を江戸時代と起つた名
手ひあり

○三輩の内先代と東山時代（先代）の宋元の画風
へと起る土佐家が久しく喜へ、法風（先代）の
を刺し（先代）先代家を久しく喜く、
先起（先代）一朝廷の倭傳とて古雅な流る倭傳界
に没るものゆへ倭傳を以て立つた人なり、

洋の影響を受けたる雲南廣東等其の甚者と
省き支那文化の中央を以て之を論ずんば黄河と揚
子江を中心とし少くも南北二種の差を認めざる
べし支那は江南河北に於ける風俗氣習の異
同を説くものあり乃ち文化美術の上は於て風俗
の均一なるを固く怪する是れ也山水畫は於
ける南宗北宗の区別は潯泉の口吻は倣ひし明代諸
家の専ら唱道するものあり沈氏の言を以て
上らば南の畫を稱して畫院の言を絶つと温潤と
冷斬と試みるも其の言を甘く不説或は言を絶

ふ失ふものありと亦以て文藝上自ら此の二
種の区別を考査するもの必要を暗示せしものあり
今試みて南北の中心なる黄河と揚子江との氣力
を異する所を挙ぐ
黄河の遙く曠野千里又千里殆んと窮極する
所なきを以て山は太行秦嶺等ありて中原
の危嶺を破るは是れ多し而して揚子江を以て中原
危峰前は濛濛たる非ざるを以て危嶺後を極す
河を以て樹木多く江を以て樹木少く漏えんと雖も河
を以て氣候乾燥し江を以て氣候多し河を以て

江人顔すうと眼織長きう敷千年年の一四院と
—と此の如き大にありて怪しくしと名 種族の
混んせしを彼の祀先墳墓の地とすんし容を
他の物轉せしむ。他邦の者と結婚すしを縁
子といふも亦一原因なりんハありて事也云

文化の現象に至ても江河其故を失ひて平原曠野
に圃まざる一定不変の理を求むる念ある故も易
理に於ける儒道に於ける能く静る長を以て持す
るの道を彼ける漢儒に好んで孔子道と祀して周末
百家中の概度を求めんとす昔河の南に因しきま

化せんとする非ざるも江河の文その大なるも
情政未だをさるるもあつて猶欠乏したる不あるも似
たるは江河中楚漢を以て其の源を以てし其の流を以て
けんりてにして楚漢の源を以て江漢の源を以てし其
楚漢の源を以てし其の流を以てし其の源を以てし其
河漢の源を以てし其の流を以てし其の源を以てし其
ましく六朝の間情思の微を以て其の源を以てし其
を以てし其の流を以てし其の源を以てし其の源を以てし
太皇太后を江河の源と大海の源と唐宗の大心温雅
りて巧政を以てし其の源を以てし其の源を以てし其

體の華きく北代前後聯繫の三代の長竹列國
とせむ六朝の唐を生みぬ代に宋を生む其間包
含するの氣力を貴重しし漢を周末を合て
北の時の唐宋を消化するのふ道運の上り於て儂
立のち一え傳の如きま言ふ其餘新なるべきこと
なり

縁画南の解工関係あるを以てお解と云ふの長きと
るを、お解と支那江河南の論自を解と云ふるを、
多縁味あるよまきる九月、お解の~~持~~持ふこときき
張るをまきることのちひまをすと行ふ

〇四年に於ける南の派

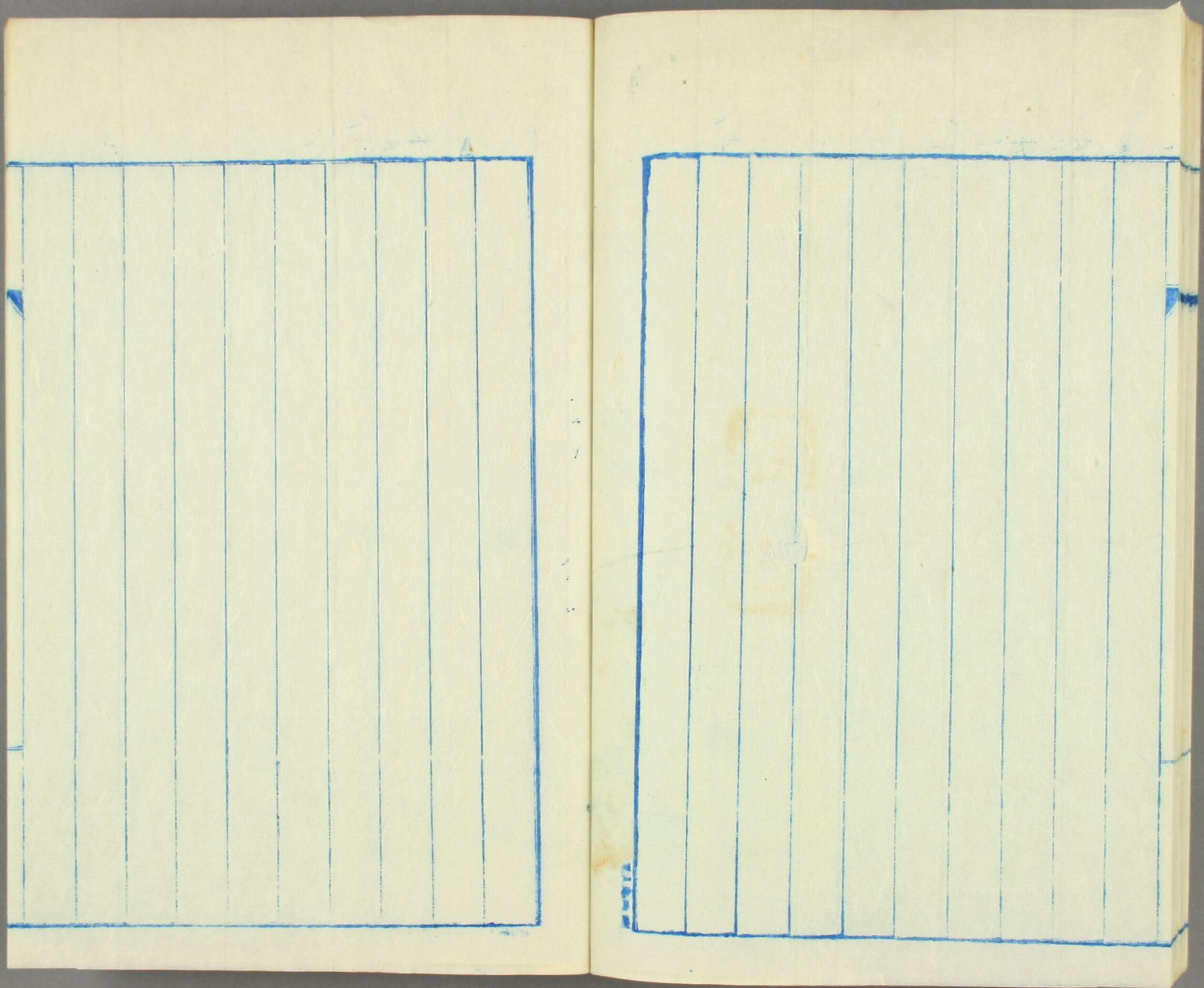
〇四年は南の派の流うめたる、~~及~~意せしう、
お左のお解と云ふて又の二派と云ふべし
北より東山時代よりおいて大なる意をせし、
りてを絶えて其法を傳へることを、
秋生組付ぬめしおふまおの女子國書信を
大に之をよとして、
其及十竹斎佩又お書画諸妙年し、
の風格を窺ふこととを、
九庵来朝し、
冷法、
山を

きしこば、こゝろを清人の風格をせぬ、漸く心
を南宋畫に傾くことありしか、ついで彭城の、
國南海の徒、まゝして南畫を唱道し、柳里茶
池大雅、謝荃、村おつぎと興を、其人如て画は
北京ありしことを知るもの南海の如きも其根葉
を回復する格調をおいてを略せんと欲すといは
其の技術の點をえんとす、未だ自境に和を
し、も里茶、大雅、荃、村の輩をして教ひ興らし
めんとす、二人の力するを、百の人名を直二湖といひ
郭と著、海又八仙をさむ、つゝ、え、尾、地、の、人、を、京、海

に、任、ま、こ、の、入、る、の、の、字、を、も、て、稱、せ、と、す、又、南、海、の、名
を、珍、と、い、は、ま、を、伯、玉、と、い、ふ、と、ん、ん、も、南、海、の、郭、と、
稱、せ、と、す、紀、州、の、儒、者、と、し、た、あ、の、才、子、と、を、双、と、稱、と、
き、昔、の、清、人、茶、大、木、畫、語、を、著、せ、と、す、あ、き、に、其、格
の、倣、ひ、と、す、柳、里、茶、大、雅、等、と、す、こ、の、人、を、郭、と、
畫、法、を、問、ひ、し、と、す、と、す、と、す、と、す、と、す、と、す、と、す、と、
を、深、し、と、す、柳、里、茶、大、雅、等、と、す、と、す、と、す、と、す、と、
海、家、の、庶、流、と、す、つ、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
究、て、と、す、と、す、と、す、と、す、と、す、と、す、と、す、と、す、と、
ものをつくるべしといふことありし、後多しといふことを試

その用ゐるゝことより竹洞の山水梅邊の花弁と古
精ぬの城の達す、関東の南宗の画絶えを行
はんぞうしに、文政の末つと、釧雲泉関東の年
王、如の南宋画を主唱し、つひに高久雷庵、海
を華山、椿椿堂の徒をいひし、関東においては
この流まろく行はるゝことゝらんを、長崎を清
西人の居る地あるを伊豆久、沈南蘋、苔来、往
てしことゝて一種の南宋画ありしが、文政五年
江藤圃来朝をし、もて終つゝ、織の三浦、権の
木下、通の雲、あいつが、維新の年、中西耕を、あつ

暢堂、海を華、田能村直入、僧五岳、野口
張谷の徒つて、一の大、月をらんし、もつと大
持、人として、もつと、只、僅、子、流、和、亭、野、口、張
川村、雨、谷、の、徒、ある、のみ、(指井の徒、葛)
日、ある、旅、け、る、南、の、流、を、流、を、と、高、は、志、を、も、つ、と、い、ふ、と
ある、を、あ、つ、と、い、ふ、徒、を、と、い、ふ、と、い、ふ、



以下全て

白紙

明治三十五年
二月七日起草

才藏學人